

日本の経済成長とともに日本へ万博を誘致する動きが加速した。昭和四十二年（一九六七年）、大阪万博に向け日本のデザイン界の力を結集し

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
けん けん あん けん え

②

た専門委員会が充足。丹下健三さんを中心に十二人の建築家が集まった。そこに私一人デザイナーで参画したから十三人目の男と言われた。

会場となる広大な千里丘陵にいろいろなパビリオンが建つ。来場者を案内するサインや照明、ベンチ、ゴミ箱、ト

イレ、水飲み場、休憩所、電話ボックスなど多くの種類を必要とした。そうした設備はストリートファニチャーと総称される。

丹下さんは「栄久庵君はトイレやゴミ箱で万博をやりたいのかね」と冗談まじりに言ったが、「日本人がゴミのポイ捨てをしているところや立ち小便しているところを外国

チャー部門の統括責任者となつた。

四面の観音像と言われたせいでどこに置かれた。情報を一つ出すこととどれだけ交通整理ができるかということも学んだ。

総入場者六千四百万の人がこのベンチをさすったとか、ここで水を飲んだとか、人々とデザインとのかかわり合いを

デザイン界の力 結集

街路設備の統括責任者に

の新聞が写真に撮って、日本の万博はこの程度だと報道した。どうしますかと答えた。

丹下さんは、万博で都市の原型を作ろうと考えていたので、ストリートファニチャーの必要性をすぐ認めてくれた。

昭和四十五年三月、ついに

大阪万博が開催された。GKと剣持勇事務所などの仲間を集めて私がストリートファニ

肌で感じる事ができた。

この間、剣持勇先生の紹介で四十二年から数年、東大工学部で土曜日だけ講師をした。剣持先生は新制作展で私が椅子の作品を出した時、「座れない椅子だけど、美しければ評価すべきだ」と言ってく

あまりに悪いので、「君たちが私を先生として敬意を表するならば、私は赤門を振り返ることがあるだろう。そうでないならば、二度と赤門を振り返ることはない」と言ったら教室も静かになった。



大阪万博の施設配置を考
 える筆者(右から2人目)

立候補で見送りとなった。四十四年のロンドン総会で改めて四十八年の日本開催を立候補した。そして次の四十六年、スペインのバルセロナ総会で次期総会を日本で開くと正式に決まりかけたところ、突然アイルランドが立候補した。ICSIDは欧州諸国が中心で日本は不利だ。

私は「皆さんが日本に投票しないなら、地球はいまだに平たいものだからだれもが認識するだろう」と演説で訴えた。すると大拍手。続いて、和服の日本人と洋服の欧米人が箱根を背景に野点を掲げている風景のポスターを掲げた。「イースト・ミート・ウエスト」という文字も入っている。こうしたアピールが功を奏して、全会一致で日本開催が決まった。

(インターストリアル・デザイナー)